
 書 評 ・ 紹 介

Ian Morris

*Why the West Rules – For Now:
The Patterns of History, and What They Reveal About the Future*

Profile Books, London, 2010, 757pp.

まだ邦訳は出ていないようであるが、タイトルを仮訳すれば「なぜ西洋に覇権があるのか？—今のところ」とでもなるだろうか。著者のモリス氏はイギリス生まれ、アメリカ・スタンフォード大学教授の歴史学者・考古学者であり、2010年に出版されたこの本でなぜ西洋が世界を支配しているのか、なぜ産業革命は中国でなくイングランドで起こったのか、という疑問に対して、人類史スパンの1万4千年前から現在史に至る「社会開発度」を数値化し、その計量的分析から歴史の再解釈、さらには未来の見通しを示している。その疑問に対する答えをあえて単純化すれば、東洋はこれから西洋を超える可能性があるが、そもそも東洋と西洋の差が消滅することもありうるし、現代の動向のまま今後100年続けばどこかで破たんが起きるが、そうならないように画期的な技術革新が起こる可能性がある、ということのようである。

人口開発論的には、この「社会開発度」をどう定義するかは興味深いだが、著者はそれを、①エネルギー利用度 (Energy Capture)、②社会組織度 (Organization) の指標としての最大都市人口、③戦争実行能力 (War-making Capacity)、④情報技術 (Information Technology) とし、それぞれを紀元前14,000年から紀元2000年の範囲で数値化し西洋と東洋で比較している。人類がアフリカ発祥であることから、当初地理的に西洋は東洋に先駆けていたが、その差は紀元前後のローマ帝国・漢代中国での東西接触により縮まり、唐代以降の紀元600年から1700年では東洋が西洋を凌駕するに至った。その後英国で始まった産業革命により、1900年の社会開発度は西洋が大きく東洋に先駆けるが、2000年にはその差は縮んでいる。それら詳しい算出方法自体は、モリス氏の web ページにて閲覧も可能である。

各時代についての解説には様々な要素がちりばめられているので、それら一つずつ吟味するにはページが足りないが、東洋・日本からの視点で興味深いのは、唐から明にいたる時代で東洋が西洋を上回ったと示した点である。近年つとに、中世中国の再評価は盛んになってきているものの、人口数以外の数値で示したものはあまりないのではないか。また本書で東洋とはあくまでも中国であり、朝鮮半島・日本はその周縁、という捕らえ方に終始しており、これは今のアメリカの世界観を反映しているようでもあり興味深い。

逆に本書では中東を「西洋」に含めており、インド圏の取り扱いはいささか曖昧である。10世紀に100万人を越えたとされるバグダッド都市人口値は採用せず、その時代の中東・イスラーム社会に対する評価は低い。これはどちらかといえば、文化的な偏見というよりは、考古学者として発掘されていないものを信じることはできない、ということであろうし、この地域の客観的な考古学的歴史研究が今後発展していくように発破をかけているのではないかとすら思える。

モリス氏は、スタンフォード大学の教授であり、いわゆる「権威」的な立場であるにもかかわらず、自分がなぜ考古学者になったかという、若い頃にフォン・デニケンの「未来の記憶」、つまり宇宙人が超古代に地球に文明をもたらした、という短編映画を見たからだと書いており、要所要所に、西洋、東洋の文明発展に宇宙人は必要なかった、との解説を加えている。ウィットがちりばめられている本である。

「理系と文系が会った歴史書」というのは、クリストファー・ロイドの歴史書に使われている形容詞であるが、この本も同様である。近年グローバル・ヒストリーという分野が進展しているが、ある特定の地域に偏らず、世界全体の歴史の流れを客観的事実によって比較分析し、将来予測に生かす、という試みが多くなされつつあり、この本はその流れに沿って、ウィリアム・マクニールの「疾病と世界史」、ジャレッド・ダイヤモンドの「銃・病原菌・鉄」に続く快作であるといえる。(林 玲子)